

佳作

不安を噛め

福島県会津若松市立河東学園 後期課程

8年 渡部 碧

「つめー！」

周りの友達が振り返り、私を見る。

「別に爪噛んだっていいじゃん。」

小さい声で反抗しつつ、また手が口へのびる。母がそれを見逃すはずもなく…
…。

いつからだろう、爪を噛むようになったのは。私の爪は、白い部分が全くない。親指にいたっては、噛みすぎて血だらけだ。最近は特にひどい気がする。母の大声にも慣れてしまった。爪を噛もうと思って噛んでいるのではない。無意識なのだ。私だって治したい。爪なんか噛みたくない。

では、なぜ爪を噛んでしまうのか。母のスマホで検索する。すると「ストレスや不安を感じた時、安心感を得るために噛んでしまう」と書いてあった。なるほど、心当たりがある。

私の夢は、ファッションデザイナー。コシノジュンコさんのように、みんなが驚くデザインを描きたい。コシノさんの、だんじり祭りの提灯をモチーフにデザインしたドレスを見た時は衝撃を受けた。提灯から発想を得たとは思えない未来すぎるデザインで、私もそのようなデザインが描けるデザイナーになれると思っていた。少し前までは。

現実の壁が見え始めたのは、半年前。授業で、職業調べをした時だ。「なんて楽しい授業なのだろう」わくわくした気持ちが抑えられずにいた。早速、デザイナーになるための学校を調べる。どんどん都会方面へ検索範囲を広げる私。

「見つけた！ お母さん、この高校に通いたい。」

「あー、高校は家から通える範囲で。お金がかかりそうな学校も、できれば、ねっ？」

「えー。」

それ以上の言葉がでてこない。親だったら、子どもの夢を応援するのはあたりまえじゃないの？ 学校に行かなかったら、デザイナーになれるじゃん。

その夜、くやしくて眠れず、読書灯をたよりにデザイン画を描いていた。冷静になるにつれ、自分の気持ちがはっきり見えてきた。母に言い返せなかった自分。母の言葉がくやしいのではなく、心からデザイナーになりたいと、母を説得する熱量がない自分がくやしかったのだ。説得もできないなんて、私は本

当に、デザイナーになりたいのだろうか。急に不安な気持ちが芽生えた。

現実の壁がはっきり見えたのは、上には上がいると分かった時だ。私の周りには、絵が上手な友達がたくさんいる。友達が描いてくれた絵を持って帰ると、母はいつも褒めちぎる。私のデザイン画も、いつも褒めてくれるが、なんだか気分が晴れない。新聞の投稿欄もかかさず見ている。

「この子、上手だ。あっ、私より年上だもん。上手に決まってる。」

完全に負け惜しみだ。

少し前まで、胸を張って言えていたデザイナーという夢が、今は、胸を張って言えなくなってしまった。夢だけを見ていたのに、現実は不安を連れてきて、今日も私に爪を噛ませる。

でも、爪を噛みながらも、私はデザイン画を描くことをやめない。やっぱり好きなんだと思う。時間がなくても描いてしまう。母からは、

「その集中力、勉強に向かないかな？」

と言われ続けている。好きだからこそその集中力で、そのおかげで、私は毎日のように、タブレット教材の投稿欄にデザイン画を投稿している。これがもう1年以上になる。初めの頃は、自分で見ても笑ってしまうくらい下手で、それが投稿を続けるうちに、だんだんと上達しているのが分かる。

「毎日続けるって、一番難しいことだよ。」

好きだから続けられた投稿を、いつもこの言葉で褒めてくれる母。「努力」なんて言葉は照れるけど、これからは少しずつ努力して、長く続けていきたい。

未来の自分へ

ここまで読んで、どう思った？ まさか、もう爪は噛んでないよね？ 今の私は不安に負けていると思ったけれどこの作文を書いたおかげで、デザインが好きなこと、実は努力していることに気づくことができた。聞いてくれてありがとう。

さあ、今の自分。これからは、爪を噛まずに不安を噛んでいこうぜ！